

---

# 苦い思い出。いや、苦痛な思い出!?

桜桃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

苦い思い出。いや、苦痛な思い出！？

### 【Nコード】

N4885M

### 【作者名】

桜桃

### 【あらすじ】

署長の娘、高杉聖歌の

苦く、甘い思い出。

ある意味苦痛な思い出の一部始終を

ご覧下さい

## 1 恋！恋！恋！！

私は署長の一人娘。高杉聖歌。

あつ、皆さんにはこう行った方がいいかしら。

目暮警部や、高木刑事、佐藤刑事などの刑事さん達がいる

警察署。の署長のむすめです。これは、ある日の私の苦しい

恋物語。どうぞお聞きください。

「あつ聖歌さん。こんにちわ。」

「こんにちわ、佐藤さん。」

警視庁の中でアイドル的存在の佐藤さん。女の私でも惚れ惚れしてしまうほど、憧れ的存在。

「こんにちは、聖歌さん。」

「こんにちは、高木さん。」

高木刑事は、佐藤さんと恋仲という仲。いつか私もそんな人が現れるだろうか。

その時。

「犯人は、この人です!」

「そうか!助かったよ工藤君。また君の力を借りてしまったな。」

「いいえ、また困ったときはこの工藤新一をおよびください。」

つと聞こえた。

「おお!聖歌さん。」

「こんにちわ。目暮警部。」

「目暮警部。この人は・・・？」

「あつ工藤君。君はまだ、見てなかったね。紹介するよ、署長の娘。聖歌さんだよ。」

男の人はとても綺麗な顔立ちで、私は一瞬で好きになってしまった。これを一目ぼれ。というのだろうか。

「初めまして。工藤新一です。」

「初めまして。聖歌です。聖歌って呼んで下さい、新一って呼んでもいいかな？。」

「ごめん。わけあって、それはできないんだ。聖歌さん。」

「そうか。ごめんね、工藤君。」

「いいや、俺こそごめん。」

「あら、工藤君。浮気かしら？言いつけちゃうわよ。」

え？浮気！？

「い、いや……………そんなつ……………」

バツタン！

「工藤君！」

「工藤君！」

工藤君が倒れた……………熱を出して……………

でも、内心嬉しかったの。

だって、工藤君の家に行けるのよ？？

ここが工藤君のお家。結構大きい。

ピンポン！

「はい？」

女人の声。お母さんかな？お姉さんかな？妹さんかな？

「蘭ちゃん。」

「佐藤刑事！？新一！？」

「ら、蘭……」

「新一！しっかりしてよ、もう！」

お姉さんかな？

「とりあえず、ソファに寝かせてください。あ、佐藤刑事達。ご飯食べました？」

「ううん。まだ、これからなの。」

「じゃ、食べてくださいよ。新一はどうせおかゆ。一人で食べるには多いですから。」

「じゃ、お言葉に甘えようかな？」

「どうぞ、上がってください。」

「んゝいいニオイねゝ。蘭ちゃん。今日はハンバーグ？」

「はい。新一は昔からハンバーグが好きなもんで。」

やっぱりお姉さんか。

「蘭ちゃん達結婚式はいつごろ？」

「まだ決まってませんが、高校を卒業したら、してくれって、プロポーズされちゃって。」

「あらゝやけるわね^^」

ん？工藤君が確か、高3よね？双子なのかしら？

「工藤君とは同い年なんですか？」

「ええ、そうよ。えっと・・・」

「高杉聖歌です。聖歌って呼んで下さい。」



「聖歌さんは、私達の署の署長の娘さんなの。」

「そうなんだ・・・よろしくね！聖歌ちゃん。私のことは蘭でかまわないから。」

わたしは正直驚いた。だって、みんな、署長の娘っただけで、呼ぶ名前はいつも、

『聖歌さん』・『高杉さん』の

どれかだったから。

1 恋！恋！恋！！（後書き）

聖歌 「工藤君を奪ってやるわよー！！！」

桜桃 「燃えてますね・・・」

聖歌 「当たり前よ！久しぶりの恋だもの。  
大事にあつたためておきたいじゃない？」

桜桃 「あー、一応女の子なんですネ。」

聖歌 「一応ってなによ・・・」

桜桃 「え？あ、いやあ・・・」

## 2 縁談

「蘭さん。婚約おめでとございます。」

「ありがとうございます。聖歌ちゃん。」

「そうそう、これ、くれたのよ。指輪。」

それはとても高そうで、きらきらしているダイヤモンド。

「らーん」

「新一！？大丈夫？おかゆ作ったけど、食べられそう？」

「う・・・ん」

工藤君。お姉さんのこと呼び捨て。でも、そういう家庭あるもんね。

「はい、食べてね。」

「食わせでくれねーの？」

(?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?)

お姉さんにたべさせてもらう・・・今は甘えん坊なのかな？前聞いたとき、

両親は海外って言ってたし、寂しいのかも。

「はいはい。そのかわりおとなしく寝てなさいよ？ちょっと待って。」

T R R R R R R R R

「あつお父さん？今日ね新一が熱出しちゃって。うんうん。それで夕飯は作れないから、ポアロで食べ、てくれる？梓さんによろしくって言うておいてね。」

「新一。今日は私泊まるから。」

でも、疑いが晴れると思うこの会話を聞いていたのは佐藤と高木、新一の三人だけだった。

つとところ聖歌はトイレに行っていたのである。

「じゃ、蘭ちゃん。私たちは引き上げるわね。」

「とてもおいしかったよ。工藤君も幸せだね。」

高木刑事の言葉に蘭は赤くなった。

「あつ聖歌さん。もう、帰りますよ。」

「はい。蘭さん。ありがとうございました。ごちそうさまです。」

「気に入ってくれてよかった。」

そういつて三人は帰っていった。

「ね、パパア私、工藤君のこと気に入っちゃった。縁談持ち掛けてくれない？おねがいよ。」

「おお、かわいい聖歌ちゃんのためにパパがんばっちゃう！」

つという金持ち親子の会話の風景……

「工藤君。ちょうど良いところにいた、話をしたいんだが。」

風邪はなおり、事件で呼び出された新一は事件を解決し、帰るところだった。

「はい。なんででしょうか。」

「わしの娘をどう思う？」

「？ 普通にかわいいと思いますけど。」

「じゃあ、妻に、嫁にしてもらえないか？」

「え？」

「いや、娘が君をえらく気に入っていてね、君ならわしも安心で。」

「……すみません署長。ぼく、高校卒業したら結婚するんです。」

「

「え？？」

「すみません。長いこと待ってくれた彼女がいるんです。」

僕が高2のとき姿を消しましたよね？そのとき、すごい大きな事件があつて、

訳あつて皆の前に出られなかったんです。でも、事件が片付いてようやく戻ってこられました。彼女が僕を信じ、僕が彼女を信じ、彼女が信じてくれていたからこそ、今の僕がいるんです。彼女とは幼馴染という

関係から始まりました。そのせいか、本当の気持ちを言うのが照れくさくて、

なかなか素直になれなくて、でも、事件が出て姿を消して離れていたら

どんだけ彼女が大事か、どれだけ彼女を愛していたのかがわかつて。

事件が片付いた次の日、彼女に付き合ってくれて言ったんです。でも、また離れるかもしれない、それはいやだと思い、一年と2ヶ月ちょっと

付き合っている今、高校を卒業したら結婚しようとプロポーズし

たんです。」

話し終えると署長は「ああ、すまなかつたね。」ツといていなくなった。正直、話を聞いていると娘が叶わないことを一番理解したのはこの人かもしれない。署長はあまりにも娘がかわいそうで、みじめすぎて、「工藤君は今はその気はないと言われたよ。」っと自宅に帰ってから聖歌に言った。



### 3 次々来る彼女たち。

場所。公園。

縁談……。断られちゃった。女の子に興味がないのかな？

結構ショック。普通の男だったら喜んで引き受けてくれるのに。

あんな綺麗なお姉さんがいたら私に振り向かないのもわかるけど・  
・でもね。

もちろん蘭のことである。今日はいつ婚約してもいいように、  
『新一さん』って呼ぶんだ！がんばろう

「聖歌さん。どうかしましたか？」

ドキッ

「く、新一さん。びっくりしたわ。」

新一は新一さんという言葉に動揺せず、

「ごめんごめん。それより、結婚式の招待状見た？きてくれると嬉しい。聖歌さんにはお世話になってるし。」

蘭さんの結婚式ね。く、新一さんと一緒なら行く！

「ええ、私も楽しみ。」

「あれー？新一君？」

「園子！！」

「あら？聖歌さんじゃない？」

「園子さん。」

「知り合いか？」

「うん。うちのパーティで招待したのよ。」

親しそう。もしかしてくど……ううん新一さんどうしても呼びに

くい・・・

恋人かな？私は思い切って

「園子さんと新一さんって恋人同士なんですか？」

「」  
「」

「あははははっ聖歌さん。私たちはただの友達よ。確かにいじるにはもってこい！

でも、悪いけどタイ プじゃないのよねー。」

「俺も、園子のタイプ似合わせようなんておもわねーし、それに園子には京極さんがいるだろ？」

「うん。あっそうだ。今日はそのうわさの彼が帰ってくるのよ。こうしちゃられない。行ってくるわね。」

「ああ、気をつけろよー。」

そっか、彼女じゃないんだ。安心。

「あれ？工藤君やないの。」

「和葉ちゃん！？ってことは、あいつも……」

「うん来てはるよ。」

もしかして、今度こそ……！

「それより工藤君ええの？蘭ちゃんほつといて。」

「ああ、あと三十分はあるからな。」

「おおー工藤！ここにおつたんか！」

「服部……おまえ、和葉ちゃんおいてどこ行ってたんだよ。」

「そつや！こんなか弱い女おいて……」

「お前のどこがか弱いんやねん。お前はか弱かったら世界中の女歩けないくらいの重病や！」

「どう意味やねんそれ！！」

「そのままの意味や。怪力女！」

「そんなこといったら、蘭ちゃんだって空手やってはるよ？」

「いいんや、ねーちゃんには工藤がおるさかい。おまえには誰もおらへん

俺がおらへんかったら、お前を相手する男がいないやろ。だから、ずっと俺のそばにおれよ。」

「平次……」

遠まわしに告白しなかった！？この人。

「服部、お前告白したこと自覚してるのか？」

「は？なんで俺がこんな怪力女に告白せなあかんねん！事実を言っただまでや。」

「平次……？ 殺気」

この人。すっごい鈍感なのね。

「じ、じゃ、俺らはもう少し観光を楽しむさかい。」

「工藤君。こんなあほにつき合わせて悪かったね。今度うちにきてや！」

「いろんなお店紹介するさかい！」

「ちょーまで、その役目は俺や！おまえはねーちゃんの相手でもし  
てればいいんや。」

「なんやそれ！」

「などなど、言い合いしながら二人の姿は見えなくなった。」

結局二人の関係は親友の恋人ってわけね。

「久しぶりね、工藤君。」

「宮野？なんでそんな姿なんだよ。」

うわ！すごく綺麗な人。もう、騙されないわよ！この人もただの友達。（そうであってほしい。）

「理由は後で言うわ。工藤君、前言ってたあれ、時間までまだあるんでしょ？ちよつと見てこない？」

「ああ、そうするか。聖歌さん。じゃ、また今度。」

そういつていなくなった。今度こそ絶対彼女だ。私諦めるしかないのかな？



### 3 次々来る彼女たち。（後書き）

結局いろんな人がきました。

まだ、蘭が恋人・・・お姉さんだと思っているみたいです。

結婚式にくる聖歌の様子を考えると

面白いな〜って思っちゃいます。結局、

「〜蘭ちゃんだって空手やってはるよ?」

「いいんや、ねーちゃんには工藤がおるさかい。」

っという会話は一ミリも聞いていない聖歌でした。

#### 4 諦めない気持ち

あの後、新一さんはどうしたんだろう・・・。

「パパ。結婚式の招待状がとどいてるでしょ？」

「え？知っているのか？」

「うん。新一さんのお姉さんの結婚式でしょ？出席するから。」

「え？お姉さん？」

（工藤君にお姉さん？確か一人っ子だったよな？そもそも、  
工藤君の結婚式。工藤君は お姉さんと結婚するのか？いや、  
ここに、ちゃんと『工藤新一』『毛利 蘭』ってかいてあるし。  
・・・）

「どうかしたの？パパ。」

「いや・・・。」

「新一さん！」

「聖歌さん。」

「今日も事件？」

「ああ、その帰りだよ。」

「彼女、元気ですか？」

「え？彼女？」

「ほら、昨日来た女の人。たしか、み、み……」

「宮野？」

「そ、そう！宮野さん。」

「ちがうよ、あいつは、うん、探偵の相棒かな。女友達で唯一信頼できる奴。かな？」

女友達の方を強調した。

「そうだったの。なんだ。ごめんなさいね。」

「いいえ、じゃ、お先に。」

「さよなら。」

くくく 帰り際くくく

「あつ工藤君。」

「なんですか、署長。」

「えっとね、娘は、君が彼女もちだって知ってるのかね？」

「いえ、知らないみたいです。さっき、僕の彼女を全然違う人と勘違いしましたから。」

「そうか、じゃ、結婚式でおどろかせるとするかな。」

「あんまり悪趣味なことをすると、可愛そうですよ。」

「いいんだ、いいんだ。（笑）」

（このオヤジ、自分の娘で遊んでやがる。まるで園子の男バージョンだなこりゃ。）

「では、僕は学校の帰りなんです。」

「ああ、悪かったね、引き止めて。」

「いえ。」

そっか、工藤君の彼女じゃなかったんだ。私も少し希望もってもしいのかな？

縁談断られたからって、ココで引き下がれないわ！

後3日で蘭さんの結婚式。

さっさと結婚してほしいものだわ。

工藤君の姉といっても、女。邪魔なのよね。

私がいっきらいなタイプ。

工藤君のお姉さんだし、将来はお義姉さんになるわけで。いまのうちに愛想をふりまいておこうという魂胆。

3日間なんてあっという間。聖歌がはこの世でもっとも苦しい体験を  
迎えようとしていた。

## 5 迎える苦しみ(?) 結婚式

もう、あっという間に3日が過ぎ、今日は新一の結婚式。

「蘭さんの姿。さぞかし綺麗でしょうね。園子さん。」

「そうね、大体はだんなの力だろうけど。」

「だんなさんってどんな人なんですか？」

「どんな人も何も、相手は新しい・・・」

「  
」

園子さんの話の途中で音楽が流れた。



音楽が流れ、お父さんに手を引かれながら歩いてきた蘭さん。

新郎は立っているんだけど、まぶしくて見えない。

「あなたは蘭さんを妻とし神の御定めに従い  
聖き婚姻を結んで共にその生涯を送りますか  
あなたはこの女性を愛し、慰め、敬い、支え  
兩人の命のある限り一切、他に心移さず  
この女性の夫として身を保ちますか」

「いたしません。俺は、生涯と言わず、  
死んでも愛しぬきます。」

かっこいゝ

つて、ちょっとまって？

なんか、新一さんの声に似てなかった？

ま、まさかねえ？

「蘭さんあなたは新一さんを夫とし  
神の御定めに従い聖き婚姻を結んで  
共にその生涯を送りますか  
あなたはこの男性を愛し、慰め、敬い、支え  
両人の命のある限り一切、他に心移さず  
この男性の妻として身を保ちますか」

「はい、いたします。」

・  
・  
・  
・

あのおゝいま、

『新一さんを夫とし。  
』

つていわなかった？

もしかして、二人は、姉弟じゃなくて、

赤の他人！？

あっという間に結婚式は終わった。

「パパ、どういう意味？」

「え？」

「私がせつめいするわ。来なさい。」

言ったのは、あの宮野さん。

「工藤君と蘭さんは正真正銘、他人。元は、幼馴染だったのよ。あの二人。でも、ある日突然彼は姿を消した。その時、出会ったのよ。私達は。」

志保は、あのことを全てはなした。

（コナン、哀なっただことはのぞいて。二人の関係をはなした。）

「最初から、あなたの入り隙間は一ミリもないわ。だって、もうあの二人は夫婦なんですもの。」

「でも、振り向かすことくらい！」

「無理ね。いったでしょう？幼馴染だって。小さい頃から二人は一緒なの。」

ココまで気付き上げた二人の関係。この18年間。あなたに崩すことなんて出来ないわ。

一欠けらもね。それに、彼の心はもう、蘭の色でそまつてるから。そして、彼女の心も新一の色で染まっているの。だから、もし、工藤君が、蘭さんに振られても、生涯愛するのは彼女だけ、たぶん。一生独身でいるわね。それに、彼から振るなんてありえない。

彼女もね。二人は、信じあってるの。いえ、それ以上の絆で結ばれているのよ。」

「ねえ、宮野さん。あなたは悔しくないの？あなただって新一さんが好きなんでしょ？」

「冗談はそこまで。わかったなら、さっさとあきらめることね。」

「私、工藤君の彼女があなただと思ったの。」

あなただったらあきらめようって思ってた。所詮、その程度の恋だっただけのことかしら。」

「さあね、でも、蘭さんなら彼を信じていたでしょうね。」

例え自分に見込みが無かったとしても。」

「ええ。今ならわかる気がするわ。ありがとう。宮野さん。」

あなたのおかげで私、目がさめました。工藤君を、諦めるんじゃない。

蘭さんとの関係を祝福してるんです。私は今、快くおめでとうと言えます。」

「そう。それならよかった。」

「はい。」

私、今なら言える。

「工藤君。蘭さん。ご結婚おめでとつございます!」



5 迎える苦しみ(?) 結婚式(後書き)



そ・の・あ・と。  
(前書き)

そ・の・あ・と。

「あ、哀ちゃん！」

「あら、蘭さん。」

「どうしたの？控え室にきたときは、哀ちゃんの姿だったのに。」

「ええ。ちよつとね。そろそろ元に戻らと思うから。」

「じゃあ、ちよつと。」

「うん！」

「らん？」

「園子？」

「まったく、主役のあんたがどこにいったかって大騒ぎよ？」

「うそっ！」

「ほら、早く！」

「で、でも・・・今、哀ちゃんが・・・」

「私がいるから大丈夫。蘭は行って！」

「う、うん・・・」

ガチャ・・・

「園子さん。」

「あ、きたきた。」

「蘭さんは？」

「戻ったわ。主役だもの。」

「そう・・・」

「ねえ、哀ちゃん。覚えてる？組織のあと、新一君が重傷で・・・」

「ええ。覚えてるわ。」

「私ね、あのときに言った言葉。すつごくあとで後悔したのよ。」

「!？」

「あやまってないって思ってた・・・ごめんね。」

「あやまる必要はないわ。本当のことだし、私には、あそこにいる資格。なかったもの。」

「そんなことはない。だって、本当に私が悪かったんだもの。あやまるのが義理でしょ？それに、もう、私なんかってマイナス思考で考えるのはやめよう？」

蘭からもう、言われたと思うけど、哀ちゃんは

私の・・・私たちの大切な友達なんだから。」

「園子さん・・・」

「哀ちゃん、これからよろしくね?」

「ええ。」

新たな友情が

ここで芽生えた。



そ・の・あ・と。(後書き)

私の中での哀ちゃんは、  
小学生つということで、でも、  
志保ちゃんにも戻してみたくて・・・  
で、書きちゃいました^^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4885m/>

---

苦い思い出。いや、苦痛な思い出!?

2010年10月11日23時20分発行